

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：34101

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12602

研究課題名（和文）大礼と神宮式年遷宮からみる神楽秘曲の基礎的研究

研究課題名（英文）A Study on Kagura Hikyoku at the Enthronement Ceremony and the Vicennial Renewal of the Ise Grand Shrines in Modern Japan

研究代表者

瓜田 理子 (Urita, Michiko)

皇學館大学・現代日本社会学部・准教授

研究者番号：20812712

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：宮廷歌謡の奥秘である神楽秘曲の長期継承について、存亡の機であった近代に焦点を当て、大礼と神宮式年遷宮における奏楽事例を中心に究明を行なった。フィールドワークと文献調査を通して、相伝と奏楽に関わる関係者の継承戦略が存在したことが明確になった。
さらに、社会生態学的レジリエンス理論の適用により、近代の神楽秘曲の継承に関する方策の淵源と特徴を明らかにでき、千年に及ぶ継続の解明に一定の方向を示せた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、その探究方法にある。20年に1度の神宮式年遷宮、及び御代一度限りの大礼の両方の実地調査を遂行し、関係者に傾聴式聞き取りも行なった。神楽秘曲に関する諸資料の精査と、社会人類学的アプローチを組み合わせた調査により、神楽秘曲の長期継承の鍵となる、近代の継承戦略を明らかにし、現行祭祀の奏楽と本義の継承も確定できた。両祭祀に対する関心の高い国際社会において、神楽秘曲のインパクトは大きい。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the modern era, which was a critical period for the survival of the kagura secret song—the most elaborate and sacred music of the imperial court—this study investigated cases of performances during the imperial succession ceremonies and the Shikinen Sengu at Ise Grand Shrine to understand its long-term preservation. Through my fieldwork and research on historical manuscripts, I clarified that the inheritance strategies of those involved in the transmission and performance played a crucial role.

Furthermore, by applying the theory of socio-ecological resilience, I could elucidate the origins and characteristics of the strategies for preserving the kagura secret song in the modern era, providing a certain direction for understanding its thousand-year-long continuity.

研究分野：民族音楽学

キーワード：神楽秘曲 神宮式年遷宮 大礼 レジリエンス 社会生態学 長期継承

1. 研究開始当初の背景

日本文学では、平安時代の宮廷の御神楽の儀の成立過程や展開について飯島一彦『古代歌謡の終焉と変容』（おうふう、2007）や中本真人『宮廷御神楽芸能史』（新典社、2013）の研究成果がある。日本音楽史学では、神楽歌を家職とした綾小路家の楽書群について猪瀬千尋の成果がある。だがどれも変容と継承の理論化の試みはない。海外の民族音楽学では、音楽文化を複合的に解明する方法論が模索されている。ユブ・シュキッパーズの最新研究 *Sustainable Futures for Music Cultures: An Ecological Perspective* (Oxford University Press, 2016) は音楽文化を五つの領域から成るエコシステムとして分析する方法を提示している。ジェフ・トッド・タイトンは音楽文化を複合的に捉える理論として社会生態学のレジリエンス理論が有効だと指摘し、今後民族音楽学の理論となる可能性を示唆している。

日本の芸能や音楽文化の変容と継承の特徴をとらえるためにも、長期継承されてきた神楽秘曲について、文献学的アプローチと実地調査に基づき、欧米の最新研究を取り入れて理論化を試みるのが肝要となる。

2. 研究の目的

以下の4点の分析を通し、神楽秘曲が近代において継承の危機に直面した際に、どのような適応をし、本義を継承していったかを明らかにし、長期的継承の総合的解明を目指す。

(1) 近代における神楽秘曲の適応と継承の実態

明治から昭和初期の近代において、宮中祭祀や神宮祭祀が近代化・改正される過程で、神楽秘曲の継承危機が生じた。一方で、古義復興も盛んになり、神楽秘曲の本義を守るための方策も講じられた。これを踏まえ、変化に適応しながら何を守ってきたのかを関連資料を調査し、明らかにする。

(2) 法の制定

皇位継承儀礼の継承の方策として、どのような法整備が行われ、大礼における神楽秘曲の存続につながったのかを、関連資料を調査し、明らかにする。

(3) 近代における神宮式年遷宮の神楽秘曲導入

神楽秘曲が明治22年の神宮式年遷宮に導入された経緯と意味について、関連資料を調査し、明らかにする。

(4) 神楽秘曲のレジリエンス

システムの形成・変化・継続を分析するために有効な社会生態学的レジリエンス理論に依拠し、変容しつつも皇位継承の大礼と神宮式年遷宮の奏楽で本義を継承してきた神楽秘曲のレジリエンス（回復力・生命力）を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 明治天皇の即位礼における神楽秘曲の構成要素の分析

明治天皇の即位礼に伴い、近世と同様の御代始の三箇夜の御神楽の儀と神楽秘曲があったのか、神楽秘曲の5つの構成要素—祭祀者の天皇・奏楽者・奏楽の場及びコンテキスト・譜面・相伝方法—にどんな変化があったのか、関連する一次史料を調査する。

(2) 登極令と同附式における神楽秘曲の分析

明治42年に皇位継承に伴う儀式を規定する登極令と同附式が制定された。そこに御神楽の規定はあるが神楽秘曲の規定はない。登極令の下で神楽秘曲がどう継承されたのか吟味するために登極令関連資料を精査する。

(3) 大正及び昭和の大礼における神楽秘曲の構成要素の分析

大正4年の大礼と昭和3年の大礼は登極令に準じて執り行われた。どのように神楽秘曲が奏楽されたのか、当時の政府や大礼の奉仕者がどのように大礼と神楽秘曲をとらえていたのか、神楽秘曲の5つの構成要素にどんな変化があったのか、大礼記録から明らかにする。

(4) 伊勢神宮の神楽秘曲導入の分析

明治 22 年に宮中より神宮式年遷宮に神楽秘曲が導入され、伊勢神宮は新たな奏楽の場となった。明治 42 年、昭和 4 年の式年遷宮でも奏楽が続いた結果、近代伊勢神宮の神楽秘曲奏楽が大礼における神楽秘曲にどう影響したのか、文献調査を行い、(3) の成果と比較する。

(5) 実地調査

伊勢神宮と宮内庁の関係者への傾聴式聞き取りを行う。当該研究実施中に執り行われる大礼の記録を仔細にとり、本研究発展のための最新データの収集に着手する。大礼後には天皇の神宮御親謁と上皇の神宮奉告も行われるので、実地調査する。

4 . 研究成果

(1) 明治天皇の即位礼における神楽秘曲の構成要素の分析

明治天皇の即位礼と神楽秘曲との関係を考察するために、天理大学附属天理図書館蔵「綾小路家旧蔵楽書」該当資料、宮内庁書陵部 所蔵『内侍所渡御並御神楽等 明德～明治』、『内侍所臨時御神楽一会』、『内侍所三ヶ夜臨時御神楽留』、『徳大寺実則日記』などの該当資料を精査した。その結果、神楽秘曲が明治の即位礼に密接に結びついて御代の長久を祈念するために奏楽されたことが確認できた。この奏楽のコンテクストは、近世の御代始の御神楽における奏楽に相当することを天理大学附属天理図書館蔵「綾小路家旧蔵楽書」の「御代始三箇夜御神楽例」や「秘曲賞例」などの該当資料を調査し確認した。

これらの成果は、国内外で発表できた。国内では、2018 年度の日本歌謡学会で報告を行い、同会の機関誌『日本歌謡研究』で論文「即位礼と神楽秘曲の関係について 近世の御代始御神楽と明治四十二年の登極令」としてまとめた。国外では、2019 年にイスラエルのヘブライ大学とテルアビブ大学での講演で発表した。アメリカの出版社から 2019 年 2 月に刊行された The SAGE International Encyclopedia of Music and Culture (文化と音楽の百科事典) の中の「神道」の項目を担当し、神楽秘曲について本研究の最新内容を反映できた。

(2) 登極令と同附式における神楽秘曲の分析

近代大礼関係資料の調査明治 42 年に制定された『登極令』と同附式に関する二つの解説書である、国立公文書館蔵の賀茂百樹・大正元年印行『登極令大要』と国立公文書館と国立国会図書館蔵の多田好問・大正 3 年草稿『登極令義解』を調査し、『登極令』における神楽秘曲の位置付けを吟味した。その結果、登極令が適用されて遂行された大正と昭和の御大礼において、神楽秘曲の奏楽と即位が一体となって継承されていることを明らかにした。

(3) 大正及び昭和の大礼における神楽秘曲の構成要素の分析

国立公文書館蔵『大正大礼記録』(総目次 3 冊,本文 128 冊等)と宮内庁書陵部宮内公文書館蔵『御神楽録明治 3 -大正 8』、『神宮神嘗祭御神楽録三』、昭和:国立公文書館蔵『昭和大礼記録』(総目次 1 冊,本文 24 冊,雑件 5 ,写真帖 20 等)と『昭和大礼書類典儀部』を精査した。その結果、明治政府の神楽秘曲についての近代化の視点を明らかにし、近代の神楽秘曲の奏楽事例を分析し、神楽秘曲の近代化が現代に至る奏楽の継承にどのように影響したのかを解明した。

(2) と (3) の成果として、2019 年度日本歌謡学会秋季研究発表会にて「近代大礼における神楽秘曲 賀茂百樹『通俗講義登極令大要』と多田好問『登極令義解』を通して」と題する研究発表を行い、2020 年に同会機関誌『日本歌謡研究』にて論文化した。

(4) 伊勢神宮の神楽秘曲導入の分析

近代の神宮式年遷宮と御神楽・神楽秘曲の関係資料である、宮内庁書陵部宮内公文書館蔵『御神楽録明治 3 -大正 8』と『神宮神嘗祭御神楽録』一から三の資料を調査し、明治 22 年に宮中から神宮式年遷宮へ御神楽と神楽秘曲が導入される経緯を確認した。明治 22 年の神宮式年遷宮への神楽秘曲導入について、神宮側の視点をとらえるために、神宮司庁編『御巫清直全集 神宮神事考証 補遺下』と『神宮神事考証 前篇』を読解した。それにより、明治 22 年式年遷宮の祝詞を作文した御巫清直が、神楽秘曲導入を古義復興・神宮故実の一貫性に位置付けていたことを明らかにした。江戸後期から明治半ばまで神宮神職を務めた孫福弘孚による神事日記『櫛陰記』の翻刻(皇學館大学研究開発推進センター神道研究所、2021)を読解し、明治 4 年の神宮御改正の混乱と、朝彦親王が神宮祭主になって以降の古義復興の様相を具体的に見てとれた。これらは、社会生態学的レジリエンス理論を適用し、音楽文化の継承をとらえるためのデータにした。成果として、2023 年 9 月にルーマニアのブカレストにある The Bucharest University of Economic Studies (ASE) で開催された、第 10 回 Japan: Pre-modern, Modern and Contemporary 国際学会にて、英語で研究発表を行った。同学会開催中に研究協力者の神職による、御神楽御饗祝詞の奏上と人長舞を行った。この模様は Jurnal Cultural(ルーマニアテレビ文化局)に放送された。発表原稿は、神楽秘曲の微音の考察を加えて論文にし、ASE の学術誌 Synergy (1/2024) に掲載される。(本課題終了時には校了済である。同学術誌は 2024 年 7 月に発行予定である。)

(5) 実地調査

2019 年は、5 月から 12 月まで実施された大礼の現地調査を可能な限り行い、社会生態学的レジリエンス理論を適用するための蓄積データに最新データを加えた。具体的には諸儀式の記録、「即位礼及び大嘗祭後賢所御神楽の儀」が 12 月 4 日に斎行され神楽秘曲が奏楽されたことの確認、関係者のインタビュー、神宮御親謁の調査、一般公開された大嘗宮の撮影、東京国立博物館で特別公開された高御座と御帳台の撮影などである。神楽秘曲の長期継承が現代にも至ることが明らかにできた。

その成果として、令和元年に執り行われた大礼の最新情報とその写真を含む研究成果の一部が、Duke University Press 出版の英語の学際的学術誌 Common Knowledge 27 巻 1 号（2021 年 1 月発行）に The Xenophilia of a Japanese Ethnomusicologist というタイトルで掲載された。

（6）本課題の研究過程で当初の想定外に起きた成果

採択された研究課題は近代を中心とするが、近代の神楽秘曲の存続に重要な役割を果たした綾小路家が室町後期中絶し近世に家が再興するまでの歌の継承の流れを検証するために、近代以前の資料調査が急務となった。そこで、室町後期から近世の文献調査のため、天理図書館綾小路家旧蔵楽書の『伝来神楽流』や『信俊卿記』など室町後期から近世の資料 16 点を精査した。結果、継承者についての先行研究の一部の誤りを明らかにできた。

（1）から（5）の成果も合わせ、社会生態学的レジリエンス理論を適用して、2020 年度日本歌謡学会秋季研究発表会において、「宮廷儀礼のうたの制定 明治維新以後の神楽大曲・秘曲と『古今和歌集』巻二十大歌所御歌」と題する研究発表を行った。2021 年に同機関誌『日本歌謡研究』にて論文化した。内容は、明治政府による神楽秘曲と神楽歌の譜の撰定という近代化は、宮廷儀礼の神楽継承を支える方略であったこと、『古今和歌集』巻二十の「神あそびの歌」が後世に活用される規範性を有し、継承を支える方策であったことから、宮廷儀礼の歌謡を継承する方策の淵源と見られることを論じた。宮内省楽部の神楽歌の撰定と宮中から伊勢神宮に導入された神楽歌の撰定を比較検討し、明治 22 年の神宮式年遷宮から令和元年の大礼に至るまで、神楽秘曲が奏楽された儀礼と神楽秘曲の奏楽者名のリストを掲載し、昭和 4 年の神宮式年遷宮が秘曲の全ての奏楽者が堂上公家から宮内省楽部に完全移行したことも明らかにできた。宮廷におけるうたの制定は、予期せぬ攪乱に直面しつつも必要な変化や適応をして古態と本義を守り抜き存続するための宮中神楽の継承の方策であり、神楽歌と神楽秘曲のレジリエンスの高さを示している。宮廷歌謡の歴史や変遷についての先行研究の中でも、当該論文は社会生態学的レジリエンス理論を宮廷歌謡に適用した最初の論考である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 瓜田理子	4. 巻 58
2. 論文標題 即位礼と神楽秘曲の関係について－近世の御代始御神楽と明治四十二年の登極令－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歌謡研究	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34421/kayo.58.0_85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 瓜田理子	4. 巻 61
2. 論文標題 宮廷儀礼のうたの制定－明治維新以後の神楽大曲・神楽秘曲と『古今和歌集』巻二十大歌所御歌－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本歌謡研究	6. 最初と最後の頁 137-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34421/kayo.61.0_137	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 瓜田理子	4. 巻 60
2. 論文標題 近代大札における神楽秘曲 賀茂百樹『通俗講義登極令大要』と多田好問『登極令義解』を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歌謡研究	6. 最初と最後の頁 39-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34421/kayo.60.0_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Michiko Urita	4. 巻 27:1
2. 論文標題 The Xenophilia of a Japanese Ethnomusicologist	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Common Knowledge	6. 最初と最後の頁 86-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜田理子	4. 巻 58
2. 論文標題 即位礼と神楽秘曲の関係についてー近世の御代始御神楽と明治四十二年の登極令ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本歌謡研究	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34421/kayo.58.0_85	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Urita	4. 巻 -
2. 論文標題 Shinto	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The SAGE International Encyclopedia of Music and Culture	6. 最初と最後の頁 1943-1946
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Michiko Urita	4. 巻 20
2. 論文標題 A Song of Continuity: Kagura Secret Song and the Vicennial Renewal of Ise Jingu on the Eve of the Modern Period	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Synergy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Michiko Urita
2. 発表標題 A Song of Continuity: Kagura Secret Song and Jingu Shikinen Sengu on the Eve of the Modern Period
3. 学会等名 Japan: Pre-modern, Modern and Contemporary (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 瓜田理子
2. 発表標題 宮廷儀礼のうたの制定 明治維新以後の神楽大曲・秘曲と『古今和歌集』卷二十大歌所御歌
3. 学会等名 令和二年度日本歌謡学会秋季研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 瓜田理子
2. 発表標題 近代大札における神楽秘曲 賀茂百樹『通俗講義登極令大要』と多田好問『登極令義解』を通して
3. 学会等名 日本歌謡学会令和元年度秋季研究発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜田理子
2. 発表標題 即位礼と神楽秘曲の関係について－近世の御代始御神楽と明治四十二年の登極令－
3. 学会等名 日本歌謡学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜田理子
2. 発表標題 Emperor Meiji's Role in Sustaining Shinto (明治天皇の神道継承に果たした役割)
3. 学会等名 Hebrew University, Jerusalem (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜田理子
2. 発表標題 Kagura uta and Shinto Ritual for Amaterasu at the Imperial Palace Shrine, Japan (神楽歌と賢所の儀礼)
3. 学会等名 Tel Aviv University, Tel Aviv (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	三宅 勝正 (Miyake Katsumasa)	用賀神社・宮司	2023年ブカレストで、The Bucharest University of Economic Studies主催のレクチャー・デモンストラーションにて、御神楽御饌祝詞の奏上と人長舞を行った。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関